

## 編者あとがき

本書『学習設計マニュアル:「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン』は、これまで刊行してきた教材・授業・研修の設計マニュアルシリーズ第4弾として企画されたものである。本シリーズはこれまで、教える側・提供者側での活用を念頭に、IDの基礎を紹介してきた。それらに対し本書は、IDの基礎を学ぶ側・受講者側の視点で活用することを目的とし、これまでとは趣を異にしている。IDのノウハウは、教える側にのみ有用なものではない。学ぶ側も、自らの学習を効果的・効率的・魅力的にするために身につけておくべきものだ。

近年、自己調整学習が叫ばれ、また主体的で能動的な学習を可能にするICT環境が整う中、自らの学びを設計するノウハウが学習者に広く普及することを期待し着手した。われわれが理想とするのは、自らの学びを設計し、「学」んで「問う」ことのできる「おとな」である。

教える側の舞台裏を開陳するこの試みは、何も工夫しない売り手をより厳しい目で見定める「目の肥えた買い手」を育てることともいえる。それは、「注文の多い客」を生み出すことにもなる、ある意味危険な行為である。しかしそれはわれわれが望むところだ。IDに裏打ちされた審美眼を持つ「注文の多い客」が育つことは、より高品質な教育研修を提供者側に要求することになる。やがて自分自身でもできると自信をもつようになる本書の読者たちは、品質の悪い商品には手を出さず、自らの学びを自分自身で設計していくようになるだろう。そういう売り手と買い手の切磋琢磨に一役買うことができれば、ひいてはそれが社会の水準の向上に寄与できれば、IDも大したものだと思う。

本書は、大学生の段階的成長モデルを確立し、その育成支援システムを開発することを目的とした科研費基盤研究(B)15H02932「大学生の3段階成長モデルの確立とその育成支援システムの開発」(研究代表者:美馬のゆり)の研究チームを中心とした教育工学研究者で分担執筆したものである。各章の執筆担当者は代表者名のみを掲げているが、原稿の段階で他のメンバーからの意見を大幅に取り入れた章も多い。また、チームの中の先駆的な試みであった市川尚による岩手県立大学ソフトウェア情報学部における必修導入科目「スタディスキルズ」の講義資料がある章では、それらを活用し、大幅に改訂・加筆した。原稿段階では、メンバーの実践の中で先行的に活用し、その結果を反映させたところもある。また、国内外の資料を取り入れ、活用することで、これまでの研究の蓄積をふまえ、できる限り平易で有用な教材となることを目指した。出典を明示することに細心の注意を払ったが、先人たちのお叱りを受ける部分があるとすれば、それはひとえに編者の責任である。ご指摘いただければ幸いである。

この研究プロジェクトでは、大学におけるチュータリングを介した学生の成長を、チュータリングを受ける段階、チュータリングをする段階、自分にチュータリングをする段階の3

段階でモデル化した。先輩に教えてもらう経験、後輩を教える経験、そしてそれらの経験を踏まえて、自分の学びに生かすことができる学生を育てることが、ユニバーサル時代の大学に求められる重要な使命であると考え。かつて、このような組織的な対応が不要な学生のみが大学に入学してきた時代もあった。入学する学生のレディネスは急速に変化してきている。一方で大学の社会的使命は変わらず、自律した学び手、すなわち、生徒ではなく学生、換言すれば「おとな」を社会に輩出することにある。そうだとすれば、IDを大学生に教えることで、生徒として入学してくる大学生を、学生として卒業させる変態(Transformation)を担う役割を大学が自覚することは不可避であり、中核とさえなりうる。

この社会的ニーズは、入学試験における偏差値の高低に関わらず、高校時代までに受験術以外の学び方や学ぶことの意味を学んでこなかった、すべての大学生・大学院生に共通して存在する。また、大学時代にも学び方を学ばずに社会人となった元学生諸氏にも等しく有用なものであろう。本書は、その執筆の経緯から大学でのテキストとしての利用を想定しているが、より幅広い読者に読んでもらいたい。「今からでも遅くない」と一念発起し、自分の学びを見直す契機となることを願っている。

本書のみならず設計マニュアルシリーズ全般を通じて、北大路書房の奥野浩之さんには編集の労をとっていただいた。目標とした完成時期が1年後ろにずれたものの、無事発刊できたことは、ひとえに奥野さんの変わらぬ励ましによるものである。また原稿段階では、岩手県立大学の学生150人をはじめとして、関係各位による形成的評価を受け、大幅な改善をした。大学のテキストを想定しているのに全19章構成になったのも、評価結果を受けてのことである。その貢献を特に記して感謝したい。

2018年2月吉日

編者を代表して  
鈴木克明